

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2019年 1月 9日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

「目を高くあげて、だれが、これらのものを創造したかを見よ。(イザヤ書 40:26)

目を高くして見る

年末年始のテレビ番組では、平成の事件簿やら流行語といった、30年間を振り返る特集が数多く放映されていました。5月から予定されている即位の礼に伴って元号が変更され、1989年1月8日に始まった平成時代が間もなく終わることになります。

昨年末の2学期終業式では、神戸や校内の昔の写真をスクリーンに映しながら、歴史の話をしました。かつて「西灘駅」と呼ばれていた阪急「王子公園駅」付近の道路を路面電車が走っている写真には、生徒よりも年配の先生方のほうが関心をもって見入っておられたようです。現在、校内の玄関前ロータリーに置かれている“May. 21. 1929”の日付が刻まれた定礎石は、かつては校舎の柱の一部でした。学校が現在地に移転した1929(昭和4)年、英国から当時のグロスター公爵(現女王エリザベス2世の叔父にあたる)が来校され、定礎式(建物の礎石を据え付ける際に、その堅牢と繁栄を祈願する式)と記念植樹を行いました。定礎石は第2次世界大戦中の空襲で破損しましたが、植えられたカラタネオガタマ(通称玉神木)の樹木とともに場所を変えて校内で大切にしています。生徒たちには次のように話しました。



<現在、正面玄関前にある定礎石(左)と当時の校舎の柱(右)>

昔の校内の写真を見ていると私はいつも思うのですが、松蔭の長い歴史があるから、皆さんは今、松蔭生としていことができるわけです。皆さん一人一人が、昔の歴史から引き続く現在を生きることが、わかると思います。中学2年の歴史の教科書を持ってきました。最近の事では、2012年のことが載っています。今から50年後、皆さんが70歳近くの年齢になって孫やひ孫がいると仮定しましょう。その時代には、学校で使う教科書は紙ではなく、タブレットやノートパソコンになっていて、2018年のことが次のように書かれていると思います。「平成時代の日本では、指で操作するスマホが国民に広く普及するようになりました。学校教育では、明治時代と同様に紙の教科書が使用され、先生が生徒の前に立って説明しながら黒板に要点を書き、生徒がノートに写すという、現在の授業とは異なる形態が採用されていました。この時代の文化を平成文化と呼びます。」もしかすると、こんなことを言われるかも知れないのです。「おばあちゃん、授業で習った

んだけど、昔の教科書は紙だったの？ スマホとかいう機械があったの？」おばあちゃんになった皆さんは答えるのです。「そうね。おばあちゃんが中学生の頃は、紙の教科書しかなくて持ち帰るのが重かったし、スマホを何時間も使っていて、叱られてばかりいたよ。」ご存知かと思いますが、来年の5月に新しい天皇が即位され、平成という元号に代わって新しい元号となります。どのような元号になるのかについては、1か月前に政府が発表することになっています。この冬休みにTVなどのニュースを見る機会も多くなることでしょう。「間もなく平成時代が終わります」と見聞きすることが多くなるはずですが、なかには、元号が変わって新しい時代を迎え、歴史が変わる、という言い方をする報道もあるでしょう。みなさんに理解してほしいことは次のようなことです。先ほど、歴史の教科書の話をしました。今日この日のことが、50年後の教科書に歴史として書かれることとなります。そういう意味で、皆さんは、歴史の1ページに生きている。一人ひとりが歴史に刻み込まれていると言えるわけです。今を生きるということは歴史の1ページに生きている、ということなのです。そのように考えるとき、2つの大切なことがあります。1つめは、世の中に何が起きているのかをしっかりと見つめ、事実を知ることです。遠い場所で起こることも、身近に起きていることも情報を集めることです。2つめは、その世の中で、自分ができる最良の生き方、自分なりにベストな生き方をするということです。いつの時代であっても、自分らしく生きることができるか。自分の生き方はこれこれで、私は私の生き方をしていますと、人に語れるようになることが大切だと思います。(2018年度2学期 中高終業式 校長式辞より)

冬本番を迎え、時に舞い落ちる小雪を眺めていると、スキーのインストラクターが「下を見ないで目を高く上げて！」と言っていたことを思い出しています。目を高くあげよ、という冒頭の旧約聖書の聖句は、混乱の時代にあっても、神が万物の創造者であることを今一度、確かなものと思いき、目を上げ、心を神様に向けよと説いています。そうすれば、信仰においては足もとの土台が確かなものとなっていきます。同様に、視線を高くして、広い視野で世の中を見ることで、心のなかには、人生の指針が少しずつ整えられていくのではないのでしょうか。目を上げる、視線を高くすることは、歴史の1ページを確実に生きていく手段の1つのように思います。

2019年を迎えて 松蔭の教育理念を再確認していきます

学校教育は、平成に入った後も引き続いて従来の枠組みのなかで行われていました。学習指導要領の改訂が約10年ごとに実施され、個性を伸ばすことや生活科の新設、教科の学習内容を削減する「ゆとり教育」の推進、「総合的な学習の時間」の設置など、児童・生徒の「生きる力」を育むことが学校教育の目標とされるようになりました。週5日制を実施する学校が増え、松蔭もこれを導入していました。2000年代に入り、私学のいくつかは「学校改革」をうたい、男子校や女子校の共学化、校名の変更、有名大学への合格実績を看板にする「進学校化」をはかり、県内でも私立中学の再開や新設が相次ぎました。少子化が進行するなかで多くの私学が変貌を遂げていきました。

2010年代に入り、国際的な競争力向上や大学教育の改革などの観点も加わり、学校では知識の習得だけでなく、思考力や表現力、意欲や積極性を育成することの必要性が叫ばれるようになりました。

た。高校卒業後、どのように主体的に学ぶ姿勢を身につけているかが問われるようになったのです。現在、多くの私学は「ICT」「英語」「探求型の学び」を3本柱として、大学やその後の生涯での学びの基盤づくりをすすめています。「学び方を学ぶ」という言い方も見聞きするようになりました。中高の学校改革の1年の遅れは、生徒一人ひとりの6年分のマイナスとなる、と言われていきます。大学やその後の就労を視野に入れて生徒を送り出すわけですから、生徒が身に付けておくべき、将来につながる力を学校教育のゴールとして考える場合、時代に応じて学校もしなやかに変化していくことは当然のことでしょう。松蔭においても意識しておきたい点だと考えています。

松蔭女子学院のモットー「一粒のからし種」、中高のモットー「Open Heart, Open Mind(心を開いて、思いを自由にして)」については、これまでもお伝えしてきたとおりです。加えてこのたび、松蔭教育のキーワードとして「聖書」と「英語」という建学以来の柱、さらに「グローバル思考」「勇気」「知恵」の5つを定めました。今後、「アドミッションポリシー（求める生徒像）」「カリキュラムポリシー（教育の方針）」「ディプロマポリシー（卒業時に身に付ける力）」を公表することにしています。「英語の松蔭」として卒業までに習得する英語力の目安を提示することを含め、今一度、教育理念と目標を具体化して再確認し、宣言する作業が必要だと判断しています。

「変えられるものを変える勇気を、変えられないものを受け入れる冷静さを、そして両者を識別する知恵を与えたまえ」

米国の神学者ラインホルド・ニーバーが語った「祈り」の有名な一節です。まさに勇気と知恵を得つつ、生徒の未来の姿を目標として教育内容を刷新するとともに、「娘のように妹のように」生徒を慈しみ、育む松蔭の姿を提示したいと考えています。

1年間の単位認定海外留学 奨励奨学金制度

2019年度より、単位認定を行う1年間の海外留学制度の適用を受ける高校生を対象に、留学期間中（1年間）の松蔭高等学校授業料相当額を支給する制度を設けることになりました。校納金のうち、学年費など諸費用を除く授業料が支給されます。例えば、高1の9月に留学を開始し、高2の7月に帰国して復学する場合、その間の授業料488,400円（今年度の場合）です。さらに留学開始までに、英検準1級を取得、又は*CEFR換算スコアで同レベルの英語力まで到達した生徒に対して、30万円の特別奨励金を追加して支給します。

*CEFR 外国語の学習、教授、評価のための参照レベル枠のことで、次年度には本校も採用予定です。例えば、A2というレベルは、日常生活や仕事など、身近な事柄についてよく使われる表現を理解し、情報交換ができるような英語力とされ、英検2級程度を示します。

神戸市ふるさと納税の制度による私学支援について

ふるさと納税の制度が話題となっていますが、このたび神戸市は、この制度を利用して市内の私立高校を支援する仕組み発足させました。納税ではなく、寄付の形態で返礼品はありません。寄付された額の一部を神戸市が徴収し、残額が松蔭高校宛て支給されます。詳細は「神戸市ふるさと納税公式サイト」をご覧ください。事務室（平田事務長）までお問い合わせください。